

## 「悪人一転し政策再評価」

増山雄三

昭和三十年頃、高校で日本史の授業を受けた私などは、「田沼意次（一七一九～一七八八）」という名を聞くと、「典型的な金権腐敗の政治家」で、人事は縁故を重視した派閥で固め、賄賂を横行させ権力を恣にして、世の中を混沌濁乱させ、悪政を行なった人物だった、という印象しかない。

そんな意次は、享保四年（一七一九年）、紀州藩士から旗本になった田沼意行の長男として、江戸本郷の屋敷に生まれたが、第八代将軍となった紀州出身の徳川吉宗が、紀州系家臣を引連れ幕臣としたとき、意行も同行して、小旗本として側近に配置された。

意次は、そんな紀州系幕臣の第二世代に相当し、第九代将軍となる徳川家重の、西小丸小姓として抜擢され、享保二十年（一七三五

年）には、父の遺跡六百石を継ぎ、その十年後に、家重の第九代將軍就任に伴って本丸に仕え、禄を三千石に加増され、美濃郡上藩で起きた、百姓一揆の収束にあたった。

さらに、十代家治の恩顧と信頼を頼りに出世し、側用人となり老中を兼ね、六千石の旗本から、五万七千石の大名に成りあがり、側近を長男の「意知」や縁戚の大名らで固めると共に、大奥との関係にも腐心する事によって、権力の基盤を築いていった。

それでも、前述の様に、後世での評判は芳しくなく、「日本史の三大悪人」の一人にも挙げられ、歴史学者の大石慎三郎は、その著書の中で「彼は大変賄賂を好み、賄賂によって政治を左右する、日本史上最悪の政治家として描かれ続けた」と記している。

だが、こうした見方は、商人という「民間活力」を取り入れた、経済財政政策の再評価とともに変わり、へ賄賂にまみれた、悪徳政治家という田沼のイメージは、現在の教科書

では、もはや払拭されている」という。  
 それでは、彼が悪徳政治家だったという事  
 が、なぜ定着したのかといえれば、日本近世史  
 に詳しい藤田覚東大教授によれば、それは、  
 「長男の意知が、江戸城内の刃傷で殺された  
 事件を、世直し物語として仕立てた「田沼騒  
 動物」が庶民に広まって、天明の大飢饉や明  
 和の大火それに浅間山の大噴火が重なり、一  
 揆や打ちこわしが多発したため、それが反意  
 次感情を増幅したからだ」という。  
 そして、肥前平戸藩主だった松浦静山は、  
 随筆「甲子夜話」に「不義の富貴、誠に浮雲  
 の如くなりき」と書き、また、明治の歴史学  
 者三上参次も「如何なる歪曲も、田沼に贈り  
 ものせば行はれざるはなくて、如何なる公直  
 も、之なければ遂げ得ざりしなり」と、「白  
 河樂翁公と徳川時代」の中に記している。  
 一方、意次が悪徳政治家だった事に対する  
 再評価は、大正に入ってから兆しが見られ、歴史  
 学者の辻善之助は、大正初めに発行した「田

沼時代」という著書で意次を、へ政治上の大  
手腕を具えておったと、田沼時代につい  
ては、へ新氣運の勃興せんとする時代との  
見方を示し、幕府の財政再建で、商人の力と  
流通が生みだす利益に目をつけた、意次の見  
通しのよさを、辻は高く評価している。  
また、意次は「胡麻の油と百姓は、絞れば  
絞るほど出るもの」と、年貢米を厳しく取り  
立てるといふ、従来の策とは一線を画し、独  
占的商売を認める株仲間には、冥加金や運上  
を課し、東西で金貨と銀貨に分かれていた通  
貨を統合する、「南鐔二朱銀」を発行した。  
さらに、寺社や農民と町民に課した御用金  
をもとに、大坂に貸金会所を設け、また、口  
シア貿易を見据えた蝦夷地開発について、辻  
はへ幕末開国の糸口は、この時代に開かれた  
のであると、その施策の見通しの良さについ  
て、彼の慧眼を位置付けている。  
これら一連の政策は、生まれながらの大名  
ではなく、一代の成り上がりで、しがらみが

ないからこそ導入できたのだろうが、それだけに反発も強く、唯一の後ろ盾だった將軍家治が亡くなると、意次は、それまで持っていた権力の座を追われて、道半ばの政策は撤回され、続く松平定信の「寛政改革」は、彼の行った政治を全て否定したのだ。

ところで、へ賄賂を好み〜という意次像の実際は、どんなものだったのかについて、先の藤田教授が言うには、「受け取っていたことは事実だが、それは歴史的人物の捉え方で『悪徳政治家が開明的政治家か』という、二項対立の議論は単純すぎる」と、人間には二面性があることを指摘する。

意次が、遠江に相良城を築いた、静岡県牧之原市の学芸員である長谷川倫和さんが言うには、「今でも『意次と賄賂』はセットで語られている」と憂えるが、時代劇や小説で刷り込まれた、「悪徳政治家」というイメージは、やはりこの地でも根強く残っている。

そこで、市は二〇一九年の「意次生誕三百

年」を機に、募金による銅像建立に取り組んでいるが、完成予定は二〇二二年十月で、長谷川さんは「その頃までには『賄賂』のイメージを払拭させたい」と願っている。

そのためには、意次時代は寛容の時代でもあった事を知るべきで、彼は遺訓に「武芸心がけ候うえ余力をもつて遊芸いたし候義は勝手次第、差し留めるに及ばず候事」と記し、また、藤田さんは「家来に余暇の遊芸を認める大名の遺訓は異例だ」としている。

寛政改革時の狂歌に、「白河のきよきに魚も棲みかねて元のにごりの田沼恋しき」というものがあるが、これは、田沼の濁りの中には、何か国民の住み宜いところがあった、という事なのだろうか。

一方で、意次は文化に新たな機運を見出し、ていて、江戸時代は元禄文化と化政文化と分けて考えられてきたが、田沼時代を宝暦・天明文化として独立させていて、それは。華やかさに風俗や社会風刺が混じり合ったものと

いう、「第三の文化」というのだろう。

鈴木春信は「錦絵」を創始し、喜多川歌麿は「浮世絵」全盛期の幕を開け、川柳が詠まれ「洒落本」や「黄表紙」が世にでて、学問では、国学で「古事記伝」の本居宣長、蘭学では、「ターヘル・アナトミア」を「解体新書」に翻訳した、杉田玄白らが登場した。

そして、蘭学に関心があった意次は、杉田ばかりでなく、エレキテルの平賀源内とも関係があったといい、経済財政でとられた各種施策の革新さだけではなく、文化の面でもその才を大きく示したという。

つきるところ、田沼時代の賄賂政治は、彼の功利的経済政策の仕組み上、必然的に起った事であり、田沼が賄賂政治家だったかどうかに関係なく、分けて考えるべきものだろうが、いずれにせよ、人間の毀誉褒貶などというものは、一方だけでは判断が難しい事を痛感するが、現在の政界にも通じる所だろう。

令和二年十一月。